仮設住宅でカフェ

東北教区災害ボランティアセンター（仙台別院内）では、被災地をサポートして集会所などでカフェ（茶話会）を開いている。

5月から開始したこの取り組みは現在、宮城県名取市の仮設住宅5カ所でそれぞれ週1回程度行い、ボランティア数人が訪問して、お茶や会話、レクリエーションで楽しんでもらうほか、住民の要望に応じて僧侶が法話を行うなどしている。

8月30日には同市閖上地区の約180世帯400人が暮らす愛島の仮設住宅の集会所で初めてのカフェを開いた（写真）。高齢者や学校帰りの児童らが集まり、お茶やジュースを飲みながら、体調管理や新学期の話題などで談笑しながら和やかなひとときを過ごした。

この日訪れた約30人の大半は児童だったが、ボランティアの田原衣美さん（看護師）は「被災された皆さんは家族にも話せないほどのストレスを抱えており、気軽に家から出て誰かと話せる環境が大切。心が開ける話し相手になるには時間も必要だが、長期的にサポートして個宅に訪問できるような関係が築ければ、阪神大震災の時のような孤独死のケースも減らすことができるのでは」と話していた。

同市の仮設住宅は全部で8カ所。カフェは、田原さんら同センターの活動者が地元のボランティアグループ「ともだちin名取」（若山陽子代表）と支援活動を通して協力関係を構築し、地域と連携しながら進めている。